

#みまの名を全国へ！

～三間米の普及継承と魅力発信プロジェクト～



愛媛県立北宇和高等学校三間分校 3年生

代表者 和田恋羽
福島奏子 中井愛心 笹尾綾音 富永拓未

1. 課題設定の背景

北宇和高等学校三間分校が位置する宇和島市三間町は、三間平野が広がる盆地。温暖な気候と適度な湿度は、三間町のブランド米「三間米」の生産を盛んにした。しかし、現在は、少子高齢化による担い手不足や、三間町全体の人口減少などの様々な問題が重なり、耕作放棄地や竹林荒廃が課題となっている。(図1) 三間町出身で「井関農機」の創設者である、井関邦三郎氏の「農業従事者の苦労を改善したい」という思いに端を発する三間分校も例外ではない。入学者の減少により令和3年度に「三間高等学校」から「北宇和高等学校三間分校」に再編された。令和8年度末には北宇和高等学校に統合され、三間分校は閉校することが決まっている。(図2)

ただ、地域の方々には、衰退しつつある三間町の活性化を望んでおられる。だからこそ、私たち高校生が地域と一体になり、「おもい」を「かたち」に変える活動を始めた。私たちはこの活動を地域の課題解決を後押ししつつ町を盛り上げる活動として位置づけ「三間米の普及・継承と魅力発信プロジェクト」を展開することにした。

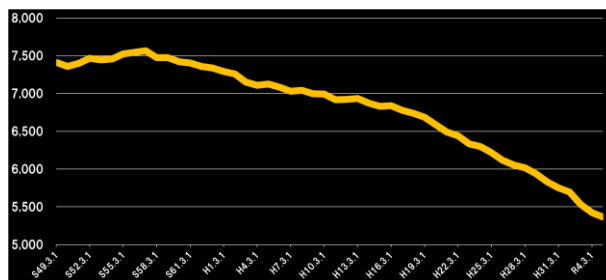


図1 三間町の人口推移
(昭和59年～令和4年まで)



図2 三間高校・三間分校の生徒数の推移

2. 過去の取り組み

令和4年度に地元商店の「KOUJIYA」とコラボし、「みま万能ソース」を開発した。味噌をベースとしたソースに、三間町産のタケノコやレンコン、ゴボウを加えた逸品が完成した。多世代での交流もでき、大きな経験になったが、イベントに参加することが地域特産品のPRにつながるわけではなかった。そこで、令和5年度に地域情報ビジネス部を立ち上げ、部活動として継続的な活動が行えるようにした。令和5年度はライスバーガーの開発に尽力し、三間米に前年度に開発した「みま万能ソース」とひめっこ地鶏・アスパラガス・チーズ・学校で栽培した大葉を挟んで焼き上げた、三間町産にこだわった「MIMAライスバーガー」が完成した。

令和5年度は、品質向上のための意見交換も行われ、三間分校で栽培した古代米(黒米)を混ぜ込んだ「MIMAライスバーガー」も新たに登場した。

3. 地元特産品を使った商品開発

(1) 「MIMAライスバーガー」販売 (令和5年7月～)

令和6年度は、「MIMAライスバーガー」のPR活動とその販売を行った。(写真1)「三間米」を広く認知してもらうにはどのような方法が最適かを考え、私たちが通学で利用している予土線駅前で行われているマルシェや地域で行われるまつりに出店した。この駅前マルシェには南予地方局地域産業振興部地域政策課もかかわっており、店員とお客様という枠だけでなく、様々な方々と協働して運営することができた。ライスバーガーについては、今年度は550個ほどの売り上げがあり、多くの人々に認知していただけたと感じている。



写真1 ライスバーガー

地域の方からは「三間米がすごく生きていておいしい」といった声や、「他にない商品でブランド化されている」といった声をいただいた。高校生が町の中心となり、地域住人を巻き込んだ活動をしたり、町外に住んでいる方を呼び込んだりするモデルが構築できたと感じている。

(2) 「美沼フルーツミックス」の開発（令和6年4月～）

MIMAライスバーガーだけでは、老若男女問わず手に取っていただけるという点において課題が残ることが分かった私たちは、新たな商品の開発に着手した。うわじま食—1グランプリに出場したレシピをもとに完成したのが「美沼フルーツミックス」（写真2）である。この商品は三間米を生かしつつ、餡子の風味をマッチさせたいちご大福だ。宇和島市にある山口製餡所のあんこ、三間町で栽培されているいちご「レッドパール」を使った、風味豊かなスイーツに仕上がった。試作の際は、山口製餡所の方にお越しいただき、製造方法の講習会を行った。お米の風味が最大限引き立つようなお米のつぶし具合や、お米とあんこの配分量など、細かな部分まで「三間の味」にこだわった製造方法を教えていただいた。

このような過程を経て完成した「美沼フルーツミックス」は、駅前マルシェ等で販売し、多くの方に手に取っていただいた。（写真3）「MIMAライスバーガー」との差別化ができ、「美沼フルーツミックス」は小さな子供たちにも人気で、次世代を担う子供たちにも三間米のおいしさを伝えることができた。



写真2 美沼フルーツミックス



写真3 販売の様子

(3) 意見交換会の実施（令和6年4～5月）

今回開発した「美沼フルーツミックス」については、様々な方々を交えて意見交換会を実施した。三間町を盛り上げるために設立されたNPO団体「みまプロジェクト」を交えての意見交換会（写真4）では、三間米本来の甘みを引き出すための米の炊き方を協議した。その結果、お米に少量の塩を混ぜて炊き上げることで、お米の甘みが引き立つことが分かった。また、「高齢社会を生きる会」からの提案で、「美沼フルーツミックス」の試食会及び意見交換会を開催（写真5）した。この会は、三間町のサードプレイスとして様々な世代の方が集う古民家で行われた。若い世代だけの考えや意見では気づくことのできなかった新たな視点も加わり、多世代の意見が反映したグローバルな商品に仕上がった。人と人をつなぐ場所での開催ということもあり、温かみを感じながら多くの方々と交流を深めることができた会となった。三間町の持つ課題の解決と、住み続けられる街づくりを目指す取組の重要な起点となった。



写真4 意見交換会の様子



写真5 高齢社会を生きる会との試食会の様子

(4) 販売実績

【美沼フルーツミックス】

令和6年5月	みまプロジェクト5名との商品開発検討会
令和6年5月	予土線駅前マルシェにて100個販売（みまプロジェクト、山口製餡所など7名と参加）
令和6年5月	高齢社会を生きる会との試食会にて50個製作
令和6年7月	吉田町夏祭りにて70個販売

【ライスバーガー】

令和6年7月	南予地方局地域政策課より20個注文依頼
令和6年8月	道の駅みま新米まつりにて110個販売
令和6年11月	コスモスまつりにて102個販売



図3 ライスバーガー売上推移

令和6年11月 予土線駅前マルシェにて92個販売
 令和6年11月 三間小学校との交流会にて5年生35人と、35個共同製作
 令和6年12月 ディスカバー農山漁村（むら）の宝での試食
 令和7年1月 おおいた・えひめ高校生交流事業「Book Day」にて50個分をクッキング教室として地元住民と共同製作、50個分参加生徒の昼食として製作
 令和7年2月 宇和島市産業まつりにて101個販売
 令和7年3月 予土線駅前マルシェにて68個販売

このような活動を通して、多くの人に三間米を知っていただくことができたと考えている。しかし、この活動は、販売して三間米を知ってもらうことがゴールなのではなく、モノそのものに価値も見出し、地域の方々と一緒に作り上げていくことが重要である。そのため、私たちはライスバーガーのクッキング体験などを通して、地域住民や次世代を担う子供たちとの「共創」を進めてきた。

4. 広報活動（三間の名を全国へ）

(1) 離島×三間（令和6年9月～）

三間町の広報活動をしようと考え調査を続けてきた私たちは、昭和初期に、三間町が宇和島市に浮かぶ日振島へ猫を送ったという取組を知った。鼠の食害を防ぐというものだったが、時が流れた現在はどうなっているのかという調査を目的として、日振島でフィールドワークを行った。

調査の結果、野猫もほとんど見られず、島民の方々も「話を聞いたことがある」という程度だったが、様々な島民の方々と絆を深めることができ、意義のある活動になった。その後、このつながりを生かして、学校間が連携した取組を行った。日振島大運動会に三間分校生が参加して、小学生や地域住民と連携を取った。（写真6）地域間が一つになり、大きな成果を得られた。また、三間分校文化祭にもお越しいただき、三間米と日振島の特産であるサザエを使ったサザエ飯を販売した。広報活動と三間米の普及継承を両立することができた意義深いものであった。（写真7）継続してこのような取組が行えるよう、地域間の連携と広報活動を続けていきたい。



写真6 日振島第運動会の様子



写真7 サザエ飯販売の様子

(2) 県外×愛媛（令和7年1月～）

「三間の名を全国へ！」のキャッチフレーズのもとで活動している私たちは、愛媛県と他の都道府県をつなぐ活動が必要であると考えた。そこで、大分市役所と連携を取り、大分県と愛媛県の高校生が主役となり、地域を活性化させる活動を実現させた。（写真8）ライスバーガーについては、念願の県外進出を果たし、参加していた高校生50人の昼食としてふるまった。ライスバーガーが人と人をつなぐ礎となった瞬間だった。また、公民館の調理室をお借りし、ライスバーガーのクッキング教室を行った。家族で来られる方が多く、小さな子供から保護者の方まで世代を超えた交流ができた。



写真8 クッキング体験

大分県と愛媛県はフェリーの航路が通っているため、今後も地域間で連携し、人口流入の後押しができるような活動として継続していこうと考えている。この活動は大分県のメディアでも取り上げられた。地域に根差した文化の担い手として役に立てるよう尽力していきたい。

5. 地域丸ごとプロジェクト（令和5年10月～）

三間の魅力を発信するには、高校生を中心に三間町が一つになることが重要であると考えた私たちは、三間町の生活に欠かせないJR予土線を用いた広報活動に力を入れた。JR四国にご協力いただき、三間町が所属する宇和島市内で生産されているかぼちゃを用いてパンプキンアートを作成した。完成した作品は、ハロウィーンの時期に合わせてJR予土線主要駅で展示（写真9）した。この活動



写真9 パンプキンアート設置

は予土線の利用活性化にもつながり、三間町への人口流入のきっかけとなった。

また、「みま里山クウカン実験 2024 SUMMER CAMP」にも参加し、これまでの成果報告をした。他県の大学生や近隣3校の高校生、愛媛県元副知事にもお越しいただき、様々な角度から、三間の魅力を発信するためのワークショップを行った。(写真 10) JR 予土線のプロモーションビデオを撮影し、広報活動に力を入れるなどの意見が出て、より一層三間町が一つになって地域を盛り上げてくことができるワークショップとなった。今後は、私たちがこのワークショップのファシリテーターとなれるように引き続き三間の魅力を調査・発信していきたい。

三間小学校の児童とも、三間米の田植え、稲刈り、ライスバーガーづくりの計3回交流活動を行った。(写真 11) 学校が地域の中心となり、人を育てていくという点でとても意義のある活動だったと考えている。また、地域住民でもあり、将来の三間町を担う小学生との交流ができたことは、ライスバーガーが三間町に根差すきっかけとなった。今後も様々な世代に、私たちが持っている知識を子供たちに継承し、次世代につなげていきたい。



写真 10 みま里山クウカン実験にて



写真 11 小学生との交流会

6. 成果と今後の展望

(1) 地元特産品を使った商品開発

三間米を用いた商品開発を行うことで、三間米の普及及び、継承に参画することができた。ライスバーガーとフルーツミックスの二本柱が確立したことで、昨年度より幅広いニーズに応えられるようになったことは大きな成果である。ただ、三間町民には活動の成果が認知されつつあるが、三間町外から来られる方への普及ができたかどうかという点については疑問が残る。三間町には道の駅みまがあり、そこへ遠方から足を運ぶお客さんやお遍路さんは多い。今後は道の駅などと連携を図り、道の駅の利用者のニーズに合った商品開発をしていきたい。

(2) 広報活動

令和6年度は、愛媛県、高知県、大分県、東京都で広報活動を行うことができた。現地での広報活動はこの四都県にとどまったが、現地のニーズを知り、意見を反映させるという意味ではとても有意義な広報活動となった。今後はこれらの経験を踏まえ、SNSでの普及活動に力を入れたい。高校生から、次世代を担う若者へと情報を発信することで、地域活性化の起爆剤となり、大きな波を起こしたい。

(3) 地域丸ごとプロジェクト

地域の高校生が中心となり、サードプレイスでの交流活動などを行うことで、地域の課題や私たちが気付かなかった魅力を再発見することができた。その中で、私たちが入学する前に惜しまれつつ閉店したやぶれまんじゅう屋さんがあると知った。三間町では知らない人がいないほど有名だったともわかり、高齢化のために閉店したと聞いた私たちは複雑な気持ちになった。今後は地域住民や商店と高校生がひとつとなり、地域ぐるみでやぶれまんじゅうの復活プロジェクトを進めていきたい。

7. まとめ

私たちは「三間の名を全国へ！」をテーマに活動してきた。その中で三間米を使った商品については、私たちの当初の想定をはるかに超える人々に手に取っていただくことができた。その点では、三間米の普及と継承については成功しているといえる。しかし、三間町への人口流入という点では大きく課題が残った。今後は、マーケティングなどを地域商店とともに研究し、さらなる発展をとげる三間町を共創していきたい。

その中で、サステナブルな社会を目指し、私たちはSDGsの4項目である、8「働きがいも経済成長も」・9「産業と技術革新の基盤を作ろう」・11「住み続けられるまちづくりを」・12「つくる責任つかう責任」を意識した取組(図4)を行ってきた。今後はさらにこの目標を高いところまで押し上げていけるよう、私たちの取組はまだ続く。



図4 私たちが目指す柱